シリーズ

研究の動向

欧州ファッションデザイン教育の手法と実践
―Ecole de la Chambre Syndicale de la Couture Parisienne, Institut Français de la Mode の教育手法の実践を一例に―

実践女子大学　滝澤 愛

1. はじめに

ファッション校世界ランキングに目を向けると，例えば CEOWORLD magazine が2023年 3 月 6 日に発表した2023年ランキング[1] では，**1 位**が Fashion Institute of Technology（FIT）（ファッション工科大学；アメリカ）で，以下，**2 位**は Parsons School of Design（パーソンズ美術大学；アメリカ），**3 位** Antoinette Westphal College of Media Arts & Design（アントワネット ウェストファル メディア アート & デザイン大学；アメリカ），**4 位** London College of Fashion, University of the Arts London（ロンドン芸術大学 ロンドン・カレッジ・オブ・ファッション；イギリス），**5 位** Polimoda（Ente per le Arti applicate alla Moda e al Costume）（ポリモーダ（ファッション・コスチューム応用芸術研究所）；イタリア），**6 位**には世界で唯一の美術系大学院大学である Royal College of Art（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート；イギリス），**7 位** ESMOD（École supérieure des arts et techniques de la mode）（エスモード 高等芸術技術学校；フランス），**8 位**には University of Borås, Swedish School of Textiles（ボロース大学 スウェーデン繊維学校；スウェーデン），**9 位** Central Saint Martins, University of the Arts London（ロンドン芸術大学 セントラル・セント・マーチンズ；イギリス），そして**10位**に Paris College of Art（パリ美術大学；フランス）と続く．他の団体等のランキングに目を転じても，ほぼ似たようなラインナップで，世界ランキングの常連校が連なる．ここから，世界規模で名を轟かす服飾教育機関は私立のみならず，国を代表するような名門の国公立の芸術大学が主であることが解る．そしてその中にはファッションデザイン専門の学部や学科が存在し，定評ある高い教育力で人材育成をし，有名デザイナーやファッション業界で活躍する人材を多数輩出するなど，大きな成果を挙げている．

一方，日本国内の芸術大学でファッションデザイン学部や学科の名称でファッションの学問教育に特化した大学は神戸芸術工科大学（ただし2023年度募集停止）などごくごく僅かであり，国公立の芸術大学に至っては現時点で存在しない．国内の最高学府において服飾教育を専門に謳い担っているのは，その多くが創成期に裁縫女学校であったり，女子のための教育機関として創設されたりした大学である．杉野服飾大学は2002年に，文化学園大学は2012年と近年共学化したものの，他の多くは女子大学であり，その学びの門戸は諸外国の様に男子には広く開かれていない．

ここで，教育方針や育成理念を見てみると，例えば1位の FIT の SCHOOL OF ART AND DESIGN, FASHION DESIGN MAJOR（芸術デザイン学部ファッションデザイン専攻科）には，“For nearly eight decades, FIT’s Fashion Design program has cultivated creative and innovative leaders who continue to disrupt the global fashion industry.”[2]（FIT のファッションデザインプログラムは，約80年にわたり，世界のファッション業界に変革をもたらし続ける創造的で革新的なリーダーを育成している．）（筆者翻訳）とある．また本稿で取り上げる Institut Français de la Mode（フランス モード研究所）の Arts in Fashion Design（BA）（ファッションデザイン科（学士））のパンフレットには，“We are training designers for the Future of Future Fashion.”[3]（フューチャー・ファッションの未来を担うデザイナーを育成しています．），“Vous apprendrez à traduire vos idées en vêtements, à construire et affirmer une signature personnelle.”[3]（自分のアイディアを衣服に落とし込む方法を学び，自分らしさを確立していくことができます．），“This three-year program will

Ai TAKIZAWA
実践女子大学 生活科学部生活環境学科　准教授
〔著者紹介〕（略歴）日本女子大学家政学部被服学科卒業，Ecole de la Chambre Syndicale de la Couture Parisienne, Stylisme·Modélisme 特別養成コース卒業 Diplôme 取得．
〔専門分野〕ファッションデザイン，被服構成学

Copyright © 2023 The Japan Society of Home Economics

prepare you to “hit the ground running” when you graduate, whether your ambition is to work for a major luxury brand, start your own business or work as an independent designer.”[3]（この３年間のプログラムでは，大手ラグジュアリーブランドへの就職，独立起業，デザイナーとしての活動など，卒業後に「地に足をつけて働く」ための準備をします.）などと記載され，いずれの大学も世界のファッション業界でデザイナーなどのプロフェッショナルとして活躍する人材教育を明確に掲げ，オリジナリティあふれる創造性，先駆的人材育成を行っていることがわかる.

他方，国内の服飾教育を行う大学の建学理念やアカデミーポリシー，カリキュラムポリシーを見ると，教育内容や育成する人材のヴィジョンが広義に定義されているものが多く，海外の服飾教育機関と大きく異にしていることが解る．また，それらの大学の実際のカリキュラム，シラバスなどから教育内容を調査したところ，海外の実践重視より，リベラルアーツやアカデミック的な科目が多く，目指す教育の方向性も大きく違っていることも解る．しかしながら「ファッションデザイン」や「服飾デザイン」などと名の付く講義科目や実習，演習科目も僅かなコマ数ではあるものの，それらの大多数の大学で実施されている.

そこで，そういった大学の数少ないファッションデザイン科目の中で，家政系の服飾学生に対して，欧州式デザイン手法を取り入れた教育を行った場合の教育効果の検証をするべく，筆者の担当する授業内で実践をした.

2. Ecole de la Chambre Syndicale de la Couture Parisienne，Institut Français de la Mode とそのデザイン教育

授業の中で取り入れるデザイン教育手法として参考にしたのは，パリのファッション校である Ecole de la Chambre Syndicale de la Couture Parisienne（以降サンディカ校）と Institut Français de la Mode（以降仏モード研究所）の２校の手法である.

サンディカ校は，オートクチュールメゾンに携わるクリエーター達の熟練した技術と伝統を守ることと人材育成を目的に，CHANEL や Dior などのオートクチュールメゾンが会員であるパリ オートクチュール組合が設立した世界で唯一のオートクチュール学校であった．イヴ・サンローランやカール・ラガーフェルド，ヴァレンチノ，日本人では三宅一生などもここを学び舎とし，その後世界的ファッションデザイナーとして活躍をした．仏 Le Monde 紙に “l’Ecole de la Chambre syndicale de la couture parisienne, créée en 1927 pour fournir les ateliers des grandes maisons de couture, est reconnue comme l’une des meilleures formations en création de mode, particulièrement dans la technique et le savoir-faire.”[4]（1927年，主要メゾンのアトリエに（人材を）送り出すために設立されたサンディカ校は，ファッションデザイン，特にテクニックとノウハウにおいて最高の教育機関の一つとして認められています.）とあり，一定の評価のあるファッション校であった.

IFM は1986年に設立されたファッションマネージメント教育のパイオニアとして知られた高等教育機関であり，BOF（Business of Fashion）発表の2019年ファッション大学院（博士課程）のファッションビジネス・マーケティング部門ランキング[5]では，FIT に続き世界第２位になるなど，その分野での評価が高い.

両校は，近年，英語圏や英語で教育をするファッション校にランキング順位や留学生数で水を開けられている現状を鑑み，「ファッション大国フランス」としての威信を取り戻すため，2019年に合併[4)6]し，学校名が “Institut Français de la Mode” になった．そして CAP（職業適性証）の職業訓練から学士，修士，博士課程までの教育プログラムを有し，従前のフランス語に加え，英語による教育も展開するする学校へと生まれ変わった.

デザイン教育について触れると，サンディカ校のデザイン教育は IFM にも継承されており，現在の IFM のサイトにも次の様に明記されている．“L’Ecole de la Chambre Syndicale de la Couture Parisienne forme depuis 1927 des professionnels, créatifs et techniciens spécialisés dans la réalisation des collections qui y apprennent la virtuosité d’un savoir-faire mis au service de la création. Aujourd’hui l’école, devenue Institut Français de la Mode, propose une large gamme de programmes permettant de se former tout au long de sa vie à ces savoir-faire uniques au monde.”[7]（1927年以来，サンディカ校は，コレクション制作を専門とするプロフェッショナル，デザイナー，技術者を養成し，クリエーションに役立つノウハウの巧技を身に着けてきました．現在，この学校は仏モード研究所となり，世界でも類を見ない匠の技を生涯に亘って修得できる幅広いプログラムを用意しています.）

さて，筆者は1990年代末，サンディカ校の１年生に入学し，stylisme と modelisme の Diplôme 取得までの３年間にファッションコースの全てのカリキュラムを修了したが，当時のカリキュラムと教育内容について触れる．授業は月曜日～金曜日の９時～13時，14時～18時まで行われ，クリスマスやイースター，夏期休暇を除いて毎日行われた．３年間のカリキュラムの中で最も時間を割いた科目は “COUPE PAR MOULAGE（３年次には MODELISME）” と呼ばれる立体裁断法によるパターン設計の授業で，１年次で週８時間，２年次には12時間，３年次

には16時間がこの授業に充てられた．１，２年では課題ごとに渡されるデザイン画から正確にパターンを起こす技能が徹底的に叩き込まれ，３年次にはインターナショナルコンクールや卒業コレクションに向けて自身のデザイン画を元にパターン設計を行い，その修正や補正の後，本布での作品制作の指導がされた．次に多くの時間が費やされ，力が入れられていた科目は“DESSIN DE MODE（３年次はSTYLISME）”，ファッションデザインの授業で，１年次は週６時間，２年次以降は週８時間の授業内でデザイン課題に取り組むのみならず，時間外も課題に明け暮れた．その他，“COUTURE MAIN”（オートクチュールの縫い方のテクニック，主として手縫い）や“Prêt-à-Porter”（ミシン縫いによる量産のテクニック），“Patronnage”（平面製図），CAO DAO（Lectra Systèmes），テキスタイルデザイン，アクセサリーデザイン，服飾史の科目が週４時間や隔週で４時間，２時間などの時間で行われた．

ファッションデザインの授業では，１年次，９月初回授業で「服」に関する概論やファッション業界のシステムに関する概説がされたが，以降は卒業まで実践的内容であった．３カ月半程かけて９頭身ヌード画の描き方を習得し，様々なポーズを自由自在に表現できるようになった後，製品図の描き方と併せてポートフォリオの作成法が指導された．そして実際にテーマが出題され，テーマを基に発想してデザイン画に起こし，ポートフォリオに纏めて最後にプレゼンテーションをする制作課題が始まった．この，出題テーマから自身のコレクションラインをデザインし，ポートフォリオを完成させる課題は３年まで繰り返し行われ，その中で「デザイン発想する力」，「イメージを表現する力」そして「自分のデザインを相手にプレゼンテーションする力」を養成された．また，デザインにおいて，日本の学生作品に散見される『コスチューム』作品は徹底的に否定と排除をされ，『ファッション』作品でなければならないこと，またフランスらしく，『シック』や『エレガント』であることが求められた．世界のファッション業界において，高く評価されるファッションデザインの方向性は，若手ファッションデザイナーの登竜門として知られているイエール国際フェスティバルやLVMH PRIZE，ITS Contestのグランプリや入賞作品を見れば一目瞭然であろう．さて，通常の学内の授業の他に，“VIONNET”をテーマとしたデザイン課題の際には，所蔵先のパリ装飾美術館でVIONNETの本物のパターンを教員が実際にピンで組み，当時の作品写真と比べるなど，実物の見学によって学びを深めたり，レポート課題でギャラリーラファイエットやプランタンデパートなどの店舗へファッションの市場調査に赴いたり，生地の見本市であるPremière Vision Parisに見学に出掛け，先のトレンドを学んだりと，学内を飛び出し，実地で，本物，本場から学ぶ機会もあった．

このファッションデザインの授業では，ファッションデザイン理論を教えられたことは一度もなく，非常に重点が置かれ教育され続けたことは，「どのように発想し，デザインするか」の実践であった．そのために毎回必ず下準備として行うことは，リサーチブックを用意し，テーマに関連する事柄，イメージ画像などを徹底的に調査し収集することであった．名物課題として知られている，Central Saint Martins, University of the Arts Londonのファッション専攻の１年生が取り組む“WHITE PROJECT”でも，課題の始めに“WHITE”を中心に言葉を派生させるマインドマップを作成し，更にリサーチを深めていく作業をデザインに取り掛かる前に行うという．その成果として最後に発表されるファッションショーの“WHITE SHOW”では，皆が同じ“白”をテーマにデザインをスタートさせたにもかかわらず，一つとして似たような作品は無く，オリジナルの作品としてデザインが完成されている．こういった事例からも，デザインの前に行うテーマに関する徹底的なリサーチは，ファッション分野のみならず，オリジナルなデザイン発想の基盤であり，デザインの基礎教育では必須事項と言えよう．

さて，筆者の過去の担当授業の一つに２年生から４年生を対象にした約３週間の滞在期間のパリ研修があり，2017年９月にはサンディカ校，2019年９月には合併したばかりの仏モード研究所で８日間のデザイン研修を実施した．デザインに始まり４日間でデザイン画と製品図を完成させ，残りの４日間でそのパターン設計を行うプログラムである．そして，当時サンディカ校のサイトに夏季セミナーの短期コースの一つとして掲載されていた，“DU DESSIN AU VÊTEMENT（デザイン画から服へ）”を，いずれの回も研修テーマとして現地校長より提案された．その内容は，①ファッションデザイナーの展覧会に行き，デザインコードを分析．②分析したコードからインスピレーションし，各々ミニコレクションをクリエーションする．③このコレクションから１作品を選び，シーチングとシルクピンを用いボディ上で立体化する．というものであった．2017年は，折しもChristian Diorの創業70周年記念の年で大規模な回顧展がパリ装飾芸術美術館で開催されるという事もあり，校長との事前打ち合わせでデザインテーマを「Dior」に，2019年は「Yves Saint Laurent」と設定された．そしてそのテーマに関して，シルエット，ボリューム感，素材，モチーフ，色など，それらをよく考え，渡仏前に徹底的にリサーチを行い，色々と資料を収集するよう参加学生に向けて指示が出された．この，リサーチに関しては，時代を経てもその手法は変わらないものであった．だが，現地での研修

が始まり，Dior 展やイヴ・サンローラン・パリ美術館で実物作品の見学と模写（図１）の研修を半日行った後，いざ教室でデザインを始める段になると，デザインの初期教育法が筆者自身の学んだものと比べ，いくつかの点で大きく変化していた．その一つとして，コラージュによるデザイン発想が挙げられる．具体的には，テーマを基に収集したリサーチ資料を用いてコラージュをし（図２），そこからデザイン画を起こす，発想する（図３），という手法である．この手法は，ファッションデザインの初心者に対して，テーマから逸脱することなく，デザインレベルを担保しながらデザイン画を完成させるのに非常に有効であり，僅か４日間という非常にタイトなスケジュールであっても成果が出せる，大変効率の良い手法でもあった．また，その後の４日間で取り組んだ立体裁断法によるパターン設計においても，デザイン画の時点でボディのバランスを基にしたヌード画を指導されていたため，バランスを崩すことなく，どの学生もほぼ自分の描いたデザイン画通りのパターンを仕上げることが出来た（図４）．この，デザイン画のベースとなるヌード画の描き方も，その後のパターン設計作業において，画とボディとのバランスにギャップなくスムーズに設計を進められる点で，ファッションデザインの初心者や初級者には大変効果的な方法であった．

図１　イヴ・サンローラン美術館で学生が見学，模写をする様子

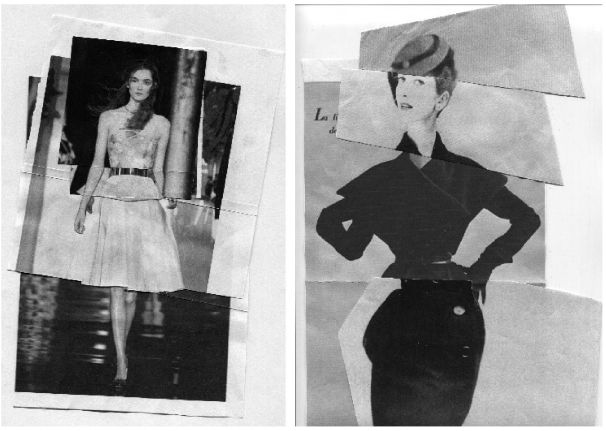

図２　リサーチ資料を使用したコラージュ（学生作品）

3. 家政系服飾学生を対象にしたファッションデザイン教育の中での実践とその効果

さて，筆者が担当するファッションデザインの演習科目において，従前より自身が教育されたサンディカ校方式を取り入れたデザイン画の基礎と，各自が決めたテーマに基づいたポートフォリオ制作の指導してきた．先述の2017年，2019年のパリ研修において，そもそもファッションデザインに大変興味があって参加した学生達ではあるが，一様にテーマに沿ってデザイン性の高い作品を生み出すことが出来た，その新しいデザイン手法と短期

図３　コラージュから完成させたデザイン画（学生作品）

図４　デザイン画から完成させたパターン（学生作品）

間での高い教育効果を目の当たりにし，早速授業に取り入れることにした．そして，ファッションは好きではあるものの将来デザイナーを目指すわけでもなく別の進路を考えている学生，あるいはそもそもファッションに興味が無く，単位のためだけに受講する学生などが混在する家政系の服飾学生に対し，どのような教育効果があるのか，どのように取り入れると良いかなど，実際に取り組んだ学生の作品から検証を行い，日本の大学におけるファッションデザイン教育の今後の在り方を考察することにした．

これから挙げる作品例は１コマの授業で伸びしろが非常に大きかった2021年の受講学生，A，B，Cの半期に亘る経過である（本人の掲載承諾済）．図５は初回授業の課題，９頭身のヌード画の基礎である．授業内では顔の描き方も指導し，きちんと描き入れるよう伝えたものの，顔が描かれていなかったり，耳が無かったりなど，他の受講生の作品と比べると，幾分稚拙な印象を受けるものであった．そこから様々なポージングの絵の練習を重ねるなどして，約１か月後の作品（図６）ではやや上達が見られた．そしてポートフォリオ用のヌード画を描いたのは初回授業から一か月半後で，図７の土台の絵がそれである．製品図やパターン設計の際にそのままのバランスで使用できるよう，胴体の太さを製品図用のボディのバランスに近似させたヌード画を採用した．そして各自のデザインテーマに沿って収集したリサーチ資料を用いてそのヌード画にフロントスタイル，バックスタイルのコラージュを行い，それを見ながら服のデザイン画のラフスケッチをした（図７中各右側）．図５や図６の絵と比較すると其々の学生の画力がかなり上がり．顔の表情はもとより，服も独自のデザインで精緻な部分までいみじくも表現が出来るようになっているのが判る．そしてポートフォリオに入れるデザイン画として，授業の最終回に完成した清書が図８である．これらから，初期段階

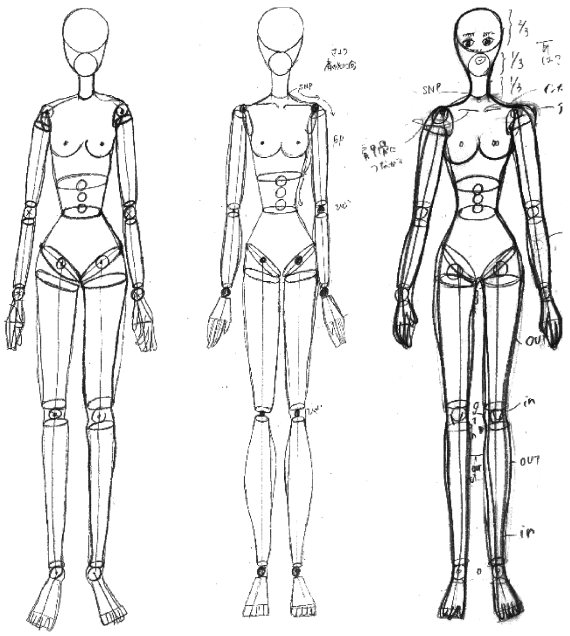

図５　初回授業の９頭身ヌード画の課題（左から学生A，B，Cの作品）

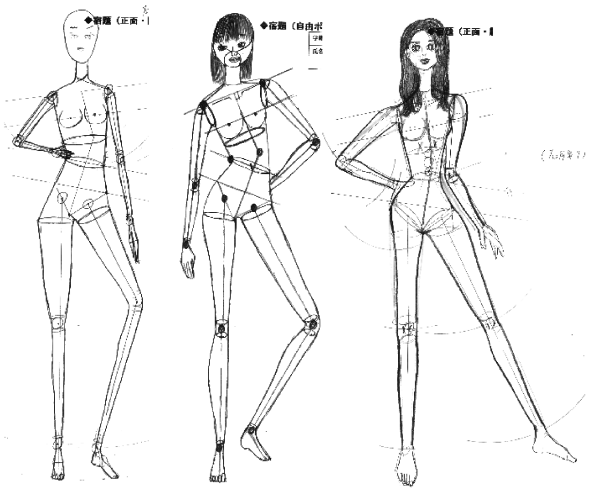

図６　約１か月後のヌード画（左から学生A，B，Cの作品）

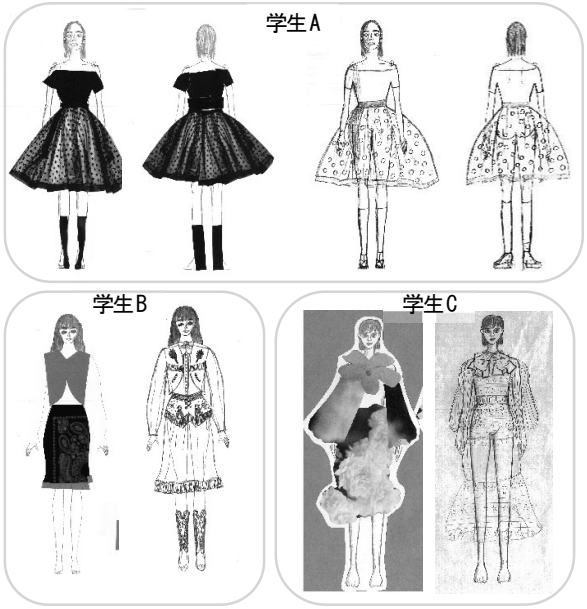

図７　コラージュ（左）とそれを基に起こしたデザイン画（右）

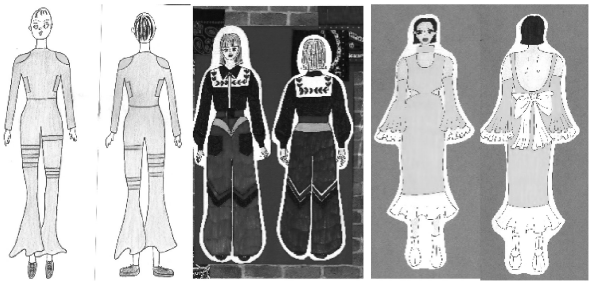

図８　清書したデザイン画（左から学生A，B，Cの作品）

で絵力があまり高くなかったとしても，様々なステップを踏み，コラージュによって具体的な形や色，素材感，ディテールなどのデザイン要素が可視化され，イメージが明瞭になることにより，それぞれの学生が個性豊かで，相手に『きちんと伝わる』ファッションデザイン画として，絵に起こし表現出来るに至っていることがお判りいただけるのではないだろうか．

家政系の学生は，入学選抜で実技の有る芸術系大学の学生と違ってそもそも絵を描くことに素養がない，あるいは苦手な学生も居る．コラージュを取り入れる以前の授業では，絵が不得手の学生は，リサーチ過程やイメージボード制作までは上手くいっていても，いざ，デザインのアイディア出しのラフスケッチやデザイン画の段になると，表現力の技量が足りず，考えたデザインを上手く紙に描きだす事が出来ずに苦労する学生が一定数居た．しかし，コラージュ手法を取り入れて以降は，これら実例で示した様に，頭の中のイメージからデザイン画として具現化していくまでの間に，その行間を埋めるような役割をコラージュが果たしてくれるために，受講学生のデザイン画の表現力が上がったことを毎回実感している．

4. 終わりに

2017年，2019年のパリデザイン研修以降のファッションデザインの演習授業の中で新たに取り入れ，その効果を検証してきたサンディカ校や仏モード研究所での最新のデザイン初期教育法は，現在までに200人弱の家政系服飾学生に実践させてきたが，学生の個々のデザイン力を引き出すのに非常に効果的であることが判明した．ただし，各自が決めたテーマを基にリサーチを深めたところで，デザインに取り掛かる前に一層デザインの方向性を明確なものにするために，現地では行っていないリサーチのまとめシートを用意し取り組ませるなど，様々なレベルが混在する学生の潜在的なデザイン力を引き出すような独自の工夫も取り入れている．寡聞にして，日本におけるデザイン画やファッションデザインのテキストや本を見てみると，その内容は主として描き方や理論に重きが置かれ，デザインの習得に一番肝心な「デザイン発想する」「デザインに発展させる」ためのメソッドが触れられていない様に見受けられる．日本において，服飾を学ぶ全ての大学生が，諸外国のトップファッション大学の様に，デザインの発想法をしっかり学び，デザイン力が底上げされるよう，今後も有効な初期教育を導入，検討し続け，学生にとってより良いファッションデザイン教育となるよう改善を図っていきたいと考える．

付　記

本稿の執筆に際し，作品掲載を快諾してくれた学生の皆様に心より感謝と御礼を申し上げます．

文　献

1）Papadopoulos, A. “Best Fashion Schools In The World For 2023”．2023年３月６日．https://ceoworld.biz/2023/03/06/best-fashion-schools-in-the-world-for-2023/（accessed 2023.5.29）．
2）SCHOOL OF ART AND DESIGN, FASHION DESIGN MAJOR. “Technology, a part of the State University of New York”．https://www.fitnyc.edu/academics/academic-divisions/art-and-design/fashion-design/index.php（accessed 2023.5.29）．
3）Institut Français de la Mode. Plaquette_BA_Fashion_Design.pdf. paris, FRANCE: Institut Français de la Mode.（accessed 2023.5.29）．
4）Neuville, J. “L’union des écoles françaises de mode fera leur force”．2016年９月１日．https://www.lemonde.fr/m-mode/article/2016/09/01/l-union-des-ecoles-francaises-de-mode-fera-leur-force_4991223_4497335.html?random=1450017776（accessed 2023.5.29）．
5）BOF（The Business of Fashion）. “The Best Fashion Schools in the World 2019 Graduate - Fashion Business & Management”. https://www.businessoffashion.com/education/best-schools/graduate/fashion-business（accessed 2023.5.29）．
6）Pfeiffer, A. “Valerie Steele: « L’union des écoles de mode françaises est une formidable avancée »”．2016年９月１日．https://www.lemonde.fr/m-mode/article/2016/09/01/valerie-steele-l-union-des-ecoles-de-mode-francaises-est-une-formidable-avancee_4991229_4497335.html（accessed 2023.5.29）．
7）Institut Français de la Mode. “Découvrez l’Ecole de la Chambre Syndicale et ses programmes”. Institut Français de la Mode: https://www.ifmparis.fr/en/opinion/decouvrez-l-ecole-de-la-chambre-syndicale-et-ses-programmes（accessed 2023.5.29）．